

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第603号 平成25年8月30日

### 風立ちぬ（1）

今年は、日本が太平洋戦争に敗れ終戦となってから68年目となりますが、今劇場では、太平洋戦争に因んだ映画が3本上映されています。その内の1本は、先日この通信でも取り上げた「終戦のエンペラー」ですが、あとの2本は「風立ちぬ」と「少年H」です。

そこで今日は、「風立ちぬ」について感じたところを述べたいと思います。

この映画の主人公は堀越二郎という実在の人物です。そして映画の題名は、堀辰雄の小説「風立ちぬ」をそのまま使っています。

堀越二郎と堀辰雄は同年代の人ですが、宮崎駿監督は、堀越二郎という実在の人物に堀辰雄の世界を融合してこの映画を作ったものであり、まさに宮崎駿ワールドだといってよいでしょう。

映画の最後に「堀越二郎と堀辰雄に敬意を込めて」という言葉が記されていますが、この映画は、堀越二郎の評伝でもなければ、堀辰雄の「風立ちぬ」を映画化したものでもありません。そして、そのような目で見れば、この映画は実に良く出来ていますし、面白いと思います。

まず、映画の中身に入る前に、実在の堀越二郎という人がどのような人なのか、見て置きたいと思います。

彼は、1903年6月群馬県藤岡市に生まれます。子供の頃から飛行機に憧れ、東京の大学で航空工学を学んだ後、航空技術者として数々の戦闘機を設計します。特に、彼が設計を担当した九試単座戦闘機の試作一号機は、逆ガル翼や沈頭鉤を採用する等画期的なもので、その技術は後の零式艦上戦闘機（零戦）を生み出す事になります。戦後は、国産旅客機「YS-11」の設計にも携わり、1982年1月77歳で逝去されています。

ところで、映画の題名（というより、小説の題名）である「風立ちぬ」とは、どのような意味なのでしょう。

この「風立ちぬ」の後には「いざ生きめやも」と続きます。この言葉は、フランスの詩人で小説家ポール・ヴァレリーの「海辺の墓地」という詩の一節「風が吹いて来た。今こそ生きようとしなければならない。」という表現を堀辰雄が文語調に翻訳したものです。「風が吹いて来た」を「風が立つ」と表現するところは流石だと思

います。

なお、「生きめやも」については、国語学者からいわせると「生きようか、いや断じて生きない、死のう」の意味になるのだそうです。ポール・ヴァレリーの詩とは、逆の意味なってしまいます。堀辰雄は、勿論その事を承知の上で、あえて「いざ生きめやも」と表現したのだと思います。

その理由は良く分かりませんが、彼自身が結核に侵され、富士見原療養所に入院しており、また、彼と婚約した矢野綾子さんも結核を患い、25歳の若さで療養先の富士見原診療所で亡くなるという経験が、大きな影響を与えているのかも知れません。「生きたい」と願いながらも「遂には死んでしまう」という避けがたい現実がある一方で、「生きよう」「生きなければならぬ」という強い思いが、「いざ生きめやも」という言葉に深く投影されているのではないのでしょうか。(塾頭：吉田 洋一)